

# 懸命



大災害によるすさまじい被害とライフラインの断絶。そんな中、混乱と不安を取り除き、被災者の助けになろうと、懸命に活動続ける人たちがいました。

## 果敢に奮闘し続ける

すさまじい被害に、電気・水道などのライフラインの断絶。戦後最大とも報道されるこの困難な状況に、果敢に立ち向かった人たちがいます。電気・水道・通信事業者などは、生活の混乱と、市民の不安を取り除くため、不眠不休で作業。対応も早く、3月11日の深夜も東北電力の職員などが通電に向け、奔走している姿が見られました。結果、12日夜には市街地などで電気が復旧。13日には水道も市内の一部で通水するなど、電気・水道・電話等が徐々に復旧していきました。

被害を最小限に食い止めようと、水門の閉鎖や避難誘導に当たった消防職員や消防団員は、そのまま夜を徹して活動。翌日からは被害状況の把握や、がれきなどの撤去、行方不明者の捜索などと、奮闘し続けました。

奮闘したのは医療機関も同じです。久慈医師会と県立久慈病院は協力して、避難所の巡回なども実施。県立久慈病

院では救急患者の治療に対応し続けるなど、非常事態の中、各医療機関が一人でも多くの命を救うために、治療にあたりました。被害に加え、燃料不足などでストップした公共交通では、市民バスと三陸鉄道が3月16日から臨時ダイヤで運行を再開。三陸鉄道は「災害復興支援列車」として久慈・野田間の無料運行を実施しました。

## 全国各地から応援が

大災害からの応急対策を支援しようと、全国各地から久慈に駆けつけた人たちもいます。自衛隊員や消防職員、そして警察官です。北は北海道から南は沖縄まで。全国から集まった頼もしい応援隊は、縁もゆかりもないであろう、この久慈地区のために力を尽くしてくれました。

避難者への炊き出しや給水、救援物資の搬送、信号停止時の交通誘導、危険が伴う漂流物の撤去作業、行方不明者の捜索など、それぞれが専門的な技術とノウハウを駆使して活動し続けました。

## 広がる助け合いの輪

厳しい状況の中、避難所などでは地域で協力し、助け合いました。食事の用意や被災した家の片付け作業など、人も物も不足する中、温かい言葉と行動で、被災者を励まし続けました。

そうした助け合いの輪は、まち全体にも広がりました。3月18日、久慈市社会福祉協議会が主体となり「久慈地区災害ボランティアセンター」を立ち上げ。市民ボランティアの募集を開始した19日には、受付先の市役所に老若男女153人が集まり、初日から夏



3月19日。夏井町大崎地区の民家から津波で流されてきた木を運び出す災害ボランティア

井町と長内町で被災者の家の片付け作業などを行いました。その後もボランティアは増え続け、20日は活動場所に久慈湊地区と野田村を追加。男女問わず中学生から年配者まで、誰もが必死になって作業しました。3月26日現在、ボランティアの登録者数は451人にのぼっています。

また高校生ボランティアグループのSEEDとグリーンピースは、21日から市内2カ所で募金活動を開始。「よろしくお願いします！」と大きな声で募金を呼び掛けました。災害ボランティアとしても活動した間澤智大くん（久慈高2年）は「ボランティアで被災地に初めて行き、被害の大きさと復興に向けて頑張っている被災者に接しました。ぼくたちも少しでも助けになりたいです」と、募金活動に声を枯らしました。

一番大変で、つらい思いをしているのは被災者。その助けになるように、多くの人が懸命に活動を続けています。復興に向けた支援と助け合いの輪は、日に日に強く大きくなっています。